



▼雪州会だよりには毎号会員によるふるさと思いの投稿が見られる。四月の壱岐の有志による松坂名誉会長の詩碑建立と歌謡音楽祭についても壱岐からの呼びかけに応じ、多くの当会有志の協賛があって感謝したが、根底にはやはり壱岐思いの気持ちがあったと思う。

原の辻遺跡は国の遺跡指定が決まった。さらに一階級上の佐賀県・吉野ケ里遺跡と並び国宝級に相当する特別史跡の指定を受けるべくことが進められている。

マスコミによれば、各地で遺跡の発掘が行われ、町村は村おこし町おこしに躍起である。吉野ケ里遺跡は年間数百万人の人が訪れると公表されている。原の辻遺跡も速やかなる遺跡の整備・復元が待たれる。かくて全国民にふるさと「壱岐」を知ってもらいたいものである。

（平成9年11月発行・第25号／東京雪州会・後藤囿丸会長記）

▼当会は三富道臣氏（第五代石田郡長、明治二十九年上京　詩人朽葉の実父）を会長とし大正初頭創設、大正末期に二代会長に松永安左ェ門翁が就任（松永翁追想記―椿原常太郎）。昭和二十八年五月二十九日松永翁出席のもと終戦後初の雪州会総会が小石川後楽園涵徳亭で開催、総会の議決を経て雪州会会則制定・施行されました。会則第二条で、会員は東京および近県に在住する壱岐出身の者ならびに壱岐に関係ある者をもって組織することが定められ、現在に至っております。

昭和三十一年十二月十三日明治記念館、同四十年十一月十七日虎の門共済会館に於いて総会が開かれ会長の松永翁（翁八二才と九一才）が出席されました。

私は何れの総会にも出席し、先輩方の雪州会即ち故郷壱岐に寄せられる心に打たれるものがありました。その気持ちはかわることなく、現在も私自身のなかにあるのです。

（平成10年11月発行・第26号／東京雪州会・後藤囿丸会長記）

▼後藤会長がこのたび任期満了により退任する決心をされ、七月になって後任を私にというお話がありました。私はその任でないので、固く辞退申しあげましたが、伝統のある雪州会のため是非引受けてくれとの強い要請があり、内諾いたしました。

幸いにしてお二人の名誉会長、各副会長、正副幹事長、会計、監事の方々、また顧問、相談役の方、理事、評議員の方々もご援助下さることになり、心強く思っております。

皆様方もご承知のとおり、東京雪州会はこれまで八十年を越える古い歴史と輝かしい伝統をもち、首都圏在住の壱岐出身者の親睦機関として強いきずなに結ばれ発展をしてまいりました。これからは更により多くの若い方々にも参加を呼びかけ、相互の懇親と啓発につとめるとともに今後一層壱岐との交流も盛んにして、親睦団体としての役割を果たしてまいりたいと考えております。

私は、七代にわたる歴代会長の伝統を受け継ぐべく、会員各位ととも